『災害文化遺産　日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展』の目的とその意義

Purpose and Significance of Exhibition as Cultural Heritage of Disaster, The Remains of Yu Wang(禹王) and its Belief in God of Flood Control in Japan

植村善博

Yoshihiro Uemura

治水神・禹王研究会副会長・立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員

Vice President of Association for the God of flood control - Wenming Research,

Visiting Reseacher Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage

The exsistence of remains of Yu Wang and its belief in God of flood control in Japan has been forgotten till recently. There were three well researched districts:Takamatsu city on stone monument of 大禹謨, Kyoto city on shrine of 禹王廟 and River Sakawa on stone monuments of 文命碑 and 文命宮. Society of remain of Yu Wang and belief in God of flood control studies was founded in 2013 and as only one society of this subject has been working.

Under the joint auspices of our society and Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Exhibition as Cultural heritage of disaster, The remains of Yu Wang and its belief in God of flood control in Japan was held in the Institute from 16th March to 16th May. Because over three houndreds peoples visited till end of April and two newspapers reported this exhibition, exsistence of Yu Wang remains and its belief of God of flood control has been widely known.

Keywords: *exhibition, purpose, remains of Yu Wang ,belief in God of flood control*

１．はじめに

禹王（大禹）とは約４千年前の古代中国において、治水事業に専念してこれを成功させた治水英雄、舜帝から王位を禅譲され夏王朝の初代帝王となった伝説上の人物である。その事績は『尚書』や司馬遷『史記夏本紀』などにおいて述べられ、治水功績や善政の人徳優れた聖王として孔子、孟子や諸子百家により賞賛され、その優れた事績がしばしば言及されている。黄河や長江の流域には禹王を祀る禹王廟や禹王宮、大禹廟、また禹王にまつわる遺跡（禹王碑、禹穴、禹陵など）が多数存在し、治水神として広く信仰されてきた。しかし、禹王に関する遺跡が日本にも存在すること、治水神として地域で信仰されてきたことなどについて最近までほとんど研究されることがなかった。ここでは日本における禹王研究史を要約するとともに歴史都市防災研究所の展示ルームでおこなった企画展示「災害文化遺産　日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展」の目的とその意義、問題点について述べる。

２．日本に於ける禹王研究の系譜

１）研究史

江戸期は徳川幕府の文治政策の根本に儒学・朱子学が採用されたため、四書五経など儒学経典の研究と教育が盛んにおこなわれた。その中で、善政の聖人君主とともに治水技術に優れ住民のため身を賭して事業に邁進した禹王の事績が広く知られるようになる。また、土木技術などの標準書である大石久敬『地方凡例録』[1] や南部長恒『疏導要書』[2] などの記述中に禹王治水に関する言及が散見される。こうして水害常襲地をかかえる地域の住民や支配者によって治水神として禹王信仰が導入され、定着していった。明治に入ると近代合理主義が優勢となり欧米流の土木工事が実施されるとともに、伝統的治水技法や治水神信仰は軽視されていく。また、廃仏毀釈や国家神道化の強制によって外来神である禹王とその信仰は無視された。日清戦争を契機に以後中国蔑視的風潮が強まる中で聖人君主および治水神としての禹王は色あせ、日本人からは忘れ去られていったと考えられる。しかし、長年にわたり水と共存し戦ってきた地域の人々によって治水神禹王の信仰や祭礼が今日まで継続されている例は多い。

図 1　栗林公園の大禹謨碑

このような日本の禹王遺跡や禹王信仰について研究史を以下にレビューしておきたい。戦前期薮田 [3] による報告は最も古いもので、酒匂川と鴨川の禹王廟について注目している。戦後期においては香川県高松市を中心に大禹謨碑をめぐる議論が盛り上がりをみせた。北原 [4] によると 1945 年頃平田三郎は大禹謨と刻字した石碑を再発見、それが 1638 年香東川の普請を実施した西嶋八兵衛（1596～1680）の筆跡と酷似することを確認している。その後、平田の研究ふまえて初めて大禹謨碑を紹介したのは福家 [5] であった。その後、大禹謨碑が社会的注目を浴びることになる契機として、恒久的保存のため 1962 年 7 月 7 日香川町大野の堤防上から高松市栗林公園へ碑を移転、遷座式を挙行したことが大きい（図 1）。当時栗林公園長の藤田勝重 [6] はこの事業を主導するとともに、本碑を建立した西嶋の治水利水の業績について報告している。大禹謨碑が新聞などにより報道され認知されると以後の高松市史や郷土史研究において必ず大禹謨碑や禹王の治水事績が記述されるようになる [7]。さらに、慢性的な水不足に悩まされてきた香川県下の水事情を改善するため吉野川から取水する香川用水事業が約 10 年を要して 1978 年に完成した。これを契機に、江戸初期の生駒藩時代に満濃池はじめ多くのため池造成や改修事業を実行して大きな貢献を果たした西嶋八兵衛の偉業が再び注目されることになる。高松市では西嶋八兵衛顕彰会が組織され、八兵衛茶会が始まり大禹謨の名を付した上用饅頭が供されるようになった。また、商品として大禹謨の和菓子や清酒が製造販売されるようになり、高松市には大禹謨をめぐる独自の文化が定着していった。

一方、瀧川 [8] は京都の目疾地蔵の仲源寺と大阪島本町高浜の大禹聖王碑、神奈川県酒匂川における文命堤碑と文命宮の存在を指摘、京都鴨川の禹王廟について注目した。その後、川嶋 [9]、瀬田 [10]、山田 [11] らにより現存しない京都旧五条橋中島の禹王廟や晴明塚，祇園・宮川町周辺の禹王伝承について論じられた。しかし、高松および京都における禹王をめぐる議論は中断するとともに他地域へ波及することはなかった。また、奥村 [12] は大阪府高浜の夏大禹王聖王碑と堅牢地神碑について、中島 [13] は先秦期の資料から禹王の記述について収録している。他方、神奈川県酒匂川における禹王遺跡が俄然注目を浴びるようになる。それには酒匂川流域の市町村史編さん事業が進み、富士山の宝永噴火（1707 年）とそれに伴う酒匂川大氾濫、幕府直轄の治水事業に従事した田中丘隅らによる文命堤や文命碑・文命宮の設置などに関する多数の地方史資料が公表されるようになった背景がある。岩橋 [14] による禹王祭礼とその変遷に関する研究はこのような成果として注目される。2006 年に酒匂川の歴史と災害史を見直そうという目的で大脇良夫氏を中心に流域の住民らによる足柄歴史再発見クラブが発足し、その研究成果を 2007 年に『富士山と酒匂川』として発刊した [15]。本書は小学校の郷土教材として利用され、地域史における文命（禹王の名）の意義が住民に広く周知されるようになった。この中で、大脇 [16] は京都鴨川にも禹王廟が存在したことに注目しそれらの調査結果を自費出版している。また、こうした地域住民の研究活動を支援した当時の開成町長露木順一氏の貢献も忘れられない。

２）治水神・禹王研究会と禹王サミット

筆者はゼミ生の卒論指導のために 2008 年 9 月酒匂川を初めて訪ねた。その際、大脇氏が車で親切に案内してくれるとともに、これ以後禹王研究についての交流が始まった。2009 年に淀川資料館の柗永正光氏の案内で淀川の禹王遺跡を一緒に調査した。ついで、島本町高浜の夏大禹聖王碑の調査を依頼され地方史料を利用して建碑と現在に至る治水神信仰について明らかにした。これが筆者の禹王研究の魁となる。また、日本各地に分布する禹王遺跡について研究者の協力体制と情報交換の機会の必要性を痛感し、2011 年 3 月 12 日に佛教大学で第 1 回の禹王研究集会を開催した。東日本大地震津波の翌日であったが、全国から 30 名の参加があり手応えを実感した。また、参加者の熱意と情報の貴重さから禹王遺跡データの集約と考察をまとめ公表する決意をした。これは 21 名の執筆協力者をえて『治水神禹王をたずねる旅』として大脇氏とともに編集、出版した [17]。この時点で禹王遺跡数は 57 件であった。同年 7 月に高松市での第 3 回禹王サミットの懇親会において治水神・禹王研究会の設立を宣言、即時に約 60 名が参加意志を示されのだった。以後、毎年春季に佛教大学で研究会を開催、2014 年から日本における禹王研究に関する唯一の研究誌である『治水神・禹王研究会誌』を年刊で発行、2018 年 4 月に第 5 号まで刊行している。この間、王敏氏の『禹王と日本人』が出版され [18]、2015 年には開成町で東アジア文化交渉学会の第 7 回国際シンポジウムが開催された。治水神禹王研究と地域間交流の分科会において日中双方から 15 本の研究発表がなされたことは特記される [19]。

一方、禹王遺跡をもつ地域住民および自治体がその価値を再評価し文化財として利用活用するための情報交換と相互交流を目的とする全国禹王サミットが 2010 年から開かれてきた。大脇 [20] によると 2017 年までに開催された自治体と参加者は以下の通りである。

第 1 回禹王サミット in 開成町：2010 年 11 月 27 日～28 日（1100 人参加）
第 2 回禹王サミット in 尾瀬・片品：2012 年 10 月 20 日～21 日（800 人参加）
第 3 回禹王サミット in 讃岐・高松：2013 年 7 月 6 日～7 日（600 人参加）
第 4 回禹王サミット in 広島：2014 年 10 月 18 日～19 日（開催地が 8 月の土砂災害による被災地となったため中止、報告書のみ発行）
第 5 回禹王サミット in 臼杵：2016 年 9 月 12 日～13 日（250 人参加）
第 6 回禹王サミット in 富士川：2017 年 10 月 7 日～8 日（700 人参加）

2017 年山梨県富士川町での第 6 回サミットにおいて特筆すべきことが 2 点ある。①過去約 10 年間の研究成果を総括する「日本の禹王遺跡分布図 2017」を発行・配布した。調査地は北海道から沖縄まで日本全土に及び、禹王遺跡数は約 130 件に達した。2013 年の出版以降の 4 年間で遺跡数は 2.3 倍に増加している。②中国浙江省の紹興市から禹跡行訪日団 8 名が参加、禹王研究の相互交流を進めることに合意した。また、京都および淀川の禹王遺跡を案内、調査して帰国した。本年 4 月に本会員 4 名が紹興市における公祭大禹陵典礼に招待され、今後につながる画期的な進展があった（図 2）。

図 2　紹興の大禹像と本研究会の献花（中央）

３．日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展の目的と構成

１）展示企画の目的と活動経過

2013 年に設立された治水神・禹王研究会は 150 名の会員を有し、毎年研究会誌（1～5 号）を発行して活発な活動を続けている。しかし、一部の地域を除いて治水神禹王の存在と歴史的意義がほとんど知られていないことに危機感をいだくようになった。そこで、これまでの禹王遺跡の研究成果を整理するとともに一般公開して社会的認知度を高めたいという希望を強くもつようになった。そこで立命館大学歴史都市防災研究所の 1 階展示ルームを利用して禹王展示を開催するための準備を開始したのが 2017 年 10 月末である。まず、京都近辺在住の若手研究者大邑潤三（佛教大学非常勤講師）片山正彦（枚方宿鍵屋資料館）谷端郷（立命館大学歴史都市防災研究所研究員）の 3 氏に相談、協力を依頼して快諾いただいたことは心強いことだっ

た。当時、本研究所副所長の中谷友樹教授に相談、展示の趣旨に賛同いただき企画書を提出したのは 11 月末であった。

企画展示の基本方針として以下の 5 点を設定した。①東アジアの視点から禹王遺跡を位置づける、②禹王信仰の中心とよべる京都盆地・大阪府淀川・岐阜県海津市・神奈川県酒匂川を中心的に取り上げ、展示物により遺跡の実態をリアルに示す、③禹王が日本文化に浸透している事例として祭礼、清酒や和菓子、瓦、御守りなどを展示する、④映像などにより禹王遺跡と地域の臨場感をだす、⑤禹王遺跡を災害文化遺産として位置づけ、歴史都市防災研究所との共催とする。また、展示期間は年間展示スケジュールを考慮して 2018 年 3 月 16 日～5 月 16 日の 2 カ月間とするとともに第 6 回治水神・禹王研究会総会を 4 月 13 日に末川記念会館で開催することに決定した。

この展示企画案は 12 月の歴史都市防災研究所運営委員会で承認を受けた。1 月から展示に関わる具体的な作業に入ることになった。①展示ルームを見学して展示物の配置を検討するとともに展示に必要な道具や設備の確認、追加をおこなった。②テーマごとのタイトル、作成フォーマットを決めた上で会員に執筆を依頼した。③展示品の確定と借用依頼、保険、輸送方法と費用分担などを検討、実施した。この作業に際して、研究所の柚木一氏、村田三奈・野村由香子さんら事務担当者には親切に対応していただき感謝している。一方、交流を開始した浙江省紹興市の鑑湖研究会（邱志栄会長）に中国の禹王遺跡分布図を展示したい旨協力を依頼したところ、日本禹王遺跡分布図を参考に地図を作成、提供するとの回答をえることができた。

２）展示の構成内容

こうして最終的に以下のような展示構成と執筆・担当者を決定した。企画展示　『災害文化遺産　日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展』、共催　治水神・禹王研究会　立命館大学歴史都市防災研究所、会場同研究所 1 階展示ルーム

Ⅰ．日本および東アジアの禹王遺跡
Ⅰ－1　中国伝説的聖人―大禹の遺跡　その 1（植村善博）
Ⅰ－2　中国治水英雄―大禹の遺跡　その 2（植村善博）
Ⅰ－3　台湾の禹王遺跡　（植村善博）
Ⅰ－4　日本の禹王遺跡－治水神信仰（植村善博）
Ⅰ－5　沖縄（琉球王国）・朝鮮半島の禹王遺跡（植村善博）
Ⅱ．　日本における禹王の文化
Ⅱ－1　現代に継承される禹王の祭礼（大脇良夫）
Ⅱ－2　日本の文化に定着した禹王－地域のシンボル－（大脇良夫）
Ⅲ．京都における禹王遺跡と伝説
Ⅲ－1　歴史都市京都の地形と洪水史（谷端郷）
Ⅲ－2　京都の禹王遺跡（谷端郷）
Ⅲ－3　京都の禹王伝説！（谷端郷）
Ⅳ．淀川流域の禹王遺跡と水害
Ⅳ－1　淀川の禹王遺跡（片山正彦）
Ⅴ．濃尾平野および海津市の禹王遺跡と輪中
Ⅴ－1　濃尾平野の地形と禹王遺跡（水谷容子）
Ⅴ－2　輪中地域と高須藩（水谷容子）
Ⅴ－3　海津の禹王遺跡（水谷容子）
Ⅵ．神奈川県酒匂川の文命（禹王）遺跡と田中休愚
Ⅵ－1　酒匂川文命東・西堤碑（関口康弘）
Ⅵ－2　富士山宝永噴火と酒匂川の氾濫（関口康弘）
Ⅵ－3　田中休愚（丘隅）の治水と文命祭（関口康弘）
映像『日本禹王遺跡の旅』（大邑潤三）
3D プロジェクション・マッピング『酒匂川の治水と水害』（大邑潤三）

図 3　展示ポスター

つぎに、ポスターの作成（図 3）および展示パンフレット（25 ページ）の作成をおこなった。そして、最終的な展示物と配置を図 4 のように確定した。

４．展示の意義と今後の課題

１）展示の成果

今回の企画展示を通して以下のような成果がえられ有意義であったといえる。

①治水神・禹王研究会と歴史都市防災研究所との共催によって、日本で最初となる禹王遺跡と禹王信仰に関する展示会を 2 ヶ月間にわたって開催することができた。4 月末までの参観者は約 300 名に達した。

②展示について京都新聞および読売新聞が紹介記事を掲載し、企画の主旨および歴史都市防災研究所の存在と活動が広く知られるようになった。

③今回の展示では禹王に関わる文化財的遺品や具体的な遺物を全国の所有者から借用、展示することができた。この中には、一般公開していない貴重品や個人の所蔵品が多数含まれている。したがって、これらを通観できるよう展示、解説できたことは大きな成果であり、参観者からも好評であった（図 5）。

④禹王信仰が地域の祭礼行事として今日も執行されている 11 の事例を紹介するとともに、その名を付した清酒や和菓子、御守り、軒丸瓦の紋などが多数存在し、日本文化に深く浸透していることを明らかにした。

⑤禹王遺跡を日本のみならず朝鮮半島や台湾など東アジア地域の視点から禹王文化としてとらえなおすことの重要性を示した。現段階での禹王文化圏の設定を図 6 に示す。また、展示の主旨を理解した浙江省紹興市の鑑湖研究会は紹興市の禹王遺跡分布図である紹興禹跡図を作成、本展において世界初公開する機会をとなった。

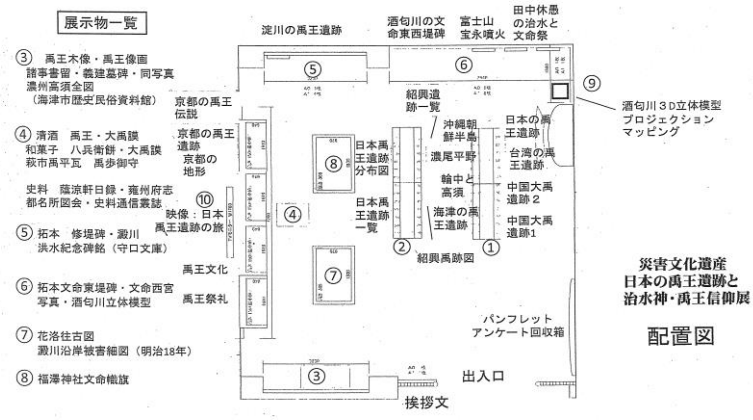

図 4　　展示物の一覧と配置図

図 5　展示ルームの状況と展示品

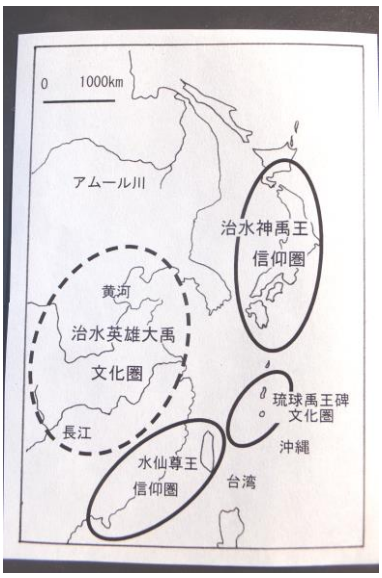

図 6　東アジアの禹王文化圏

２）今後の課題

①2018 年 4 月段階で日本の禹王遺跡は 126 件、他に禹王地名 3 件、禹王文字遺物 7 件に達している。また、遺跡や遺物の認定については本研究会に遺跡認定委員会を設置、年間数回の開催によって規定の認定基準を満たしたものについて遺跡遺物の番号を与えて認定することにしている。したがって、日本の禹王遺跡・遺物に関しては一定基準による諸特徴が明らかにされている。今後、さらに新たな遺跡遺物の発見、記載を続けなければならない。

②大脇・植村編 [17] に記載された 57 件以降に新たに発見、追加された約 80 件については調査内容に精粗があり、記述内容が不正確なものや公表されていないものもある。これらは統一基準を満たすよう改善するとともに、新たな報告集を作成する必要がある。

③禹王遺跡の調査に際して、いつ、どこに、だれが、なぜ、どのようにして地域に成立したか、その後現在までどのような変遷をへてきたかを明らかにすることが大切である。そして、地域の歴史や民俗、流域や河川の災害や治水史の中に正確な位置づけをおこなう作業が不可欠であることを強調したい。

④禹王と禹王文化の発祥地である中国との研究と情報の交流が望まれる。本年 4 月 20 日、浙江省紹興市の公祭大禹陵典礼に 4 会員が招待された。また、禹王文化の研究センターをもつ浙江越秀外語学院における中日大禹文化国際研討会において研究発表するとともに紹興市の研究者と交流した。今後、世界禹王遺跡分布図の共同制作、『治水神禹王をたずねる旅』の中国語翻訳版の出版など協力して事業が進めていく状況ができつつある。

５．まとめ

1）日本の禹王研究を概観した結果、香川県高松市の大禹謨碑、京都市鴨川の禹王廟、神奈川県酒匂川の文命碑や文命宮、文命堤など 3 カ所で先進的な研究や地域活動がおこなわれたことが明らかになった。

2）2013 年に創設された治水神・禹王研究会は日本の禹王研究の中心組織として 150 名の会員を擁するとともに禹王研究の専門誌を 5 号まで発行して活動を続けている。今後、組織の拡大と活動の活性化をはかるとともに研究内容の深化をはからなければならない。

3）日本最初の禹王遺跡と治水神・禹王信仰の展示会を立命館大学歴史都市防災研究所との共催により開催できた。展示には京都市をはじめ関西地域や関東、九州など日本各地から参観者があり、禹王遺跡と禹王信仰や文化の存在意義を広く認知させることができた。また、歴史都市防災研究所の活動を普及する点でも貢献したと考えられる。

謝辞：企画展示を開催するに当たって治水神・禹王研究会および立命館大学歴史都市防災研究所には全面的な協力と支援をいただいた。とくに、大脇良夫会長はじめ大邑潤三、片山正彦、関口康弘、谷端郷、水谷容子の皆さんには全力で展示作業に尽力してくださった。また、展示物の借用にあたって包末招、北原峰樹、國弘昌嗣、山口冨美男、海津市歴史民俗資料館、宮内庁京都事務所、守口文庫、立命館大学図書館利用支援課および同大学アート・リサーチセンターは快く協力くださった。以上の皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献

1) 大石久敬：『地方凡例録』11巻、1794
2）南部長恒：『疏導要書』上下巻、1834
3）薮田嘉一郎：禹王廟考、史跡と美術、10、pp29-35、1931.
4）北原峰樹・岡部澄子編:「大禹謨」再発見－それを受け継ぐ人たち、美巧社、 2013
5）福家惣衛：治水の神を祭る民俗、新香川 1958
6）藤田勝重：治水利水の先覚者西嶋八兵衛と栗林公園、 大禹謨顕彰会、1962
7）木下晴一：江戸時代初めの香東川治水工事（１）－「大禹謨」碑を中心に－、香川地理学会会報 26、pp35-44、2006
8）瀧川政次郎：わが国にある禹王廟、土車、13、 pp3、1980、同 ：酒匂川畔の禹王廟 、土車、17、pp3-4、1981
9）川嶋将生：法城寺と五条橋－洛中洛外図屏風の点景－、日本の美術館，7，1987
10）瀬田勝哉：失われた五条中島、月刊百科、304、1988
11）山田邦和：鴨川の治水神、花園大学文学部研究紀要、32、pp53-86、2000.
12）奥村寛純：武内神社境内の地神碑、水無瀬野、14、 1992
13）中島敏夫：三皇五帝夏禹先秦資料集、汲古書院、2001
14) 岩橋清美：近世後期における儀礼の変容と地域 ―相模国足柄上郡文命宮祭礼を中心にして―、市史研究あしがら 8、pp1-22、1996.
15）足柄歴史再発見クラブ編：富士山と酒匂川、2007
16）大脇良夫：酒匂川の治水神を考える、2007
17）大脇良夫・植村善博編：治水神禹王をたずねる旅、人文書院、2013.
18）王敏：禹王と日本人、NHKブックス、2014
19）東アジア文化交渉学会：東アジア文化交渉学会第七回国際シンポジウム資料集、 2015
20）大脇良夫：禹王サミットの開催経過と地域連携活動 歴史都市防災論文集、11、pp241-246 2017